

|             |          |
|-------------|----------|
| 群<br>教<br>七 | C02 - 01 |
|             | 平14.207集 |

# 昭和初期の県内における図画と手工を 同一教科とする指導に関する研究

— 岩崎喜久雄の実践を中心にして —

特別研修員 池田 晶子 (榛名町立榛名中学校)

## 研究の概要

現代美術教育の起点とされるのは大正後期から昭和初期の時代(1921~1940)である。この頃群馬県の図画教育界は、非常に活発な教育活動が行われており全国に先駆けた実践が行われていた。その中心となったのが岩崎喜久雄である。そこで、現在のデザイン教育の原点とされる構成教育を取り入れ、図画と手工を同一教科として実践した岩崎の理論や指導法を中心に調査を行い、今日の美術教育に生かせるものについて考察した。

【キーワード：教育史 昭和初期 図工美術 構成教育 岩崎喜久雄】

## 主題設定の理由

現代美術教育の起点とされるのは大正後期から昭和初期の時代である。まず大正10年、山本<sup>かなえ</sup>鼎が明治以来図画の時間に行われていた臨画(お手本を見てそれを描く画一的な教授法：次ページ表1)を批判し、自由画教育を提唱した。この自由画教育運動は全国的な広がりを見せ、子ども自身の個性表現を重視し、写生画を中心として創造的な描画が描かれるようになった(資料1)。

さらに昭和初期に東京を中心に行われた構成教育運動は、図画一辺倒だった当時の教育をより広い観点からとらえ直したものであり、特に我が国のデザイン教育に画期的な足跡を残し、デザイン教育の原点とされている。

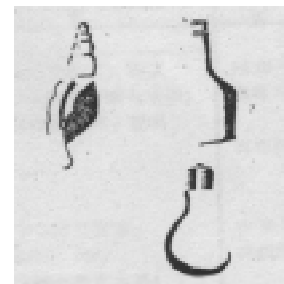
昭和10年に構成教育がドイツから導入されると、図案や色彩に関する研究が進められ、共に造形教育に属する手工科の内容も含んだ生活の中に生かす美術としての考え方をする指導者がでてきた(資料2)。この主張は第2次世界大戦による軍事体制によって否定され一時は消滅する。しかし、戦後の自由主義の時代になって再認識され、昭和22年の教育課程で図画工作科、昭和33年の学習指導要領の改訂で中学校は美術科となり、ここで戦前の構成教育が改めて見直されることになる。

こうした我が国の美術教育の変遷の中で、昭和初期に群馬県の図画教育界では、この構成教育の考え方がいち早く取り入れられ、優れた実践研究が行なわれていた。その活動の中心となったのが岩崎喜久雄である。図案指導に関心の高かった岩崎は、構成教育を熱心に学び、昭和13年構作科提案に中心的な役割を果たす。その図画と手工を同一教科とした実践は、当時、全国的にも先進的な教育として注目された。

## 資料1 自由画教育時代の作品



## 資料2 構成教育の作品 単化練習



## 形と色



岩崎の教育活動は、造形の基礎基本の学習を重視し、生活・個々の生き方を作り出すものとしての学習を、絵画分野だけではなく幅広い芸術の分野で目指そうとしたものである。さらに、戦後岩崎は特に色彩教育に力を入れ、日本のデザイン教育の基盤を作る一人として全国的な活躍をしていくことから考えても、当時の実践は、美術教育史として価値あるものであり、現在の図画工作、美術教育につながるものと見ることができる。

そこで本研究では、昭和初期に群馬県で構成教育の考えを導入し、図画と手工を同一教科として実践した岩崎喜久雄の理論や指導法を中心に調査を行い、今日の教育に生かせるものを明らかにしていきたい。

### 研究のねらい

昭和初期（昭和7年～昭和14年）、群馬県で構成教育の考えを導入し、図画と手工を同一教科とした岩崎喜久雄の理論や系統指導、造形教育としての授業実践を調べ、今日の教育に生かせるものを明らかにする。

### 研究の方法

『教科教育百年史』『日本美術教育の変遷 - 教科書・文献による体系 - 』などを資料とし、大正・昭和初期を概観し、我が国における図画教育の動向を調べる。  
昭和初期に出版された文献等から、図画手工合一論や構成教育導入の意義を明らかにする。月刊誌『新上野』『群馬美育』等を資料とし、昭和初期の群馬県における図画教育の動向を調べ、当時県内の図画教育で中心的な役割を果たした岩崎喜久雄の活動を明らかにする。  
構成教育を導入し、図画と手工を同一教科とした岩崎喜久雄の理論や系統指導、造形教育としての授業実践を調べ、現在の美術教育に生かせるものを考察していく。

### 研究の内容

#### 1 大正・昭和初期の国内の図画教育

##### (1) 図画手工合一論と手工科

明治19年、手工科は高等小学校加設科目として、明治23年尋常小学校に加設科目として設置される。内容は「高等科：木細工、金工、竹細工、粘土細工など」「尋常科：竹細工、紙細工など」であったが、重視されずほとんど有るか無いかのような状態にあった。大正期に入り、教育思潮の高まりや手工教育者の努力により徐々に手工教育の芽が育ち、大正15年小学校令改正で、手工科ははじめて高等小学校の必修教科になる(表1)。

図画科と手工科とは、共に造形教育に属するものであり、教育目標にも類似するところが少なくない。両者が綿密な関連のもとに組織されなければならないことは、既に明治時代からいわれていたが、図画手工合一論が活発に闘わされるようになったのは、大正時代

表1 図画、手工教育の変遷

| 年次            | 図画科                 |   | 手工科                       |
|---------------|---------------------|---|---------------------------|
|               | 図画教育の変遷             | 記事  | 記事                        |
| 新定画帖時代・「臨画」中心 |                     |   |                           |
| 大8            | 自由画全盛<br>写生画万能      | 山本『自由画教育』論文<br>齊藤『自由画教育論と実際』<br>山本「自由画教育」提唱           | 図画手工合一論盛んとなる<br><br>高等科必修 |
| 9             |                     |   |                           |
| 10            |                     |   |                           |
| 15            |                     |   |                           |
| 昭2            |                     |   |                           |
| 3             |                     |   |                           |
| 6             |                     |   |                           |
| 7             |                     |   |                           |
| 9             |                     |   |                           |
| 10            |                     |   |                           |
| 12            | 教育的図画教育再建<br>構成教育運動 | 自由画うち切り宣言<br>『小学図画』刊行<br>川喜田『構成教育大系』<br><br>「構作科」設置提案 | 中学校に作業科設置                 |
| 13            |                     |   |                           |
| 14            |                     |   |                           |
| 16            |                     |   |                           |
| 17            |                     |   |                           |
| 国民            |                     |   |                           |
| 17            |                     |   |                           |
| 学校            |                     |   |                           |
| 22            |                     |   |                           |
| 33            |                     |   |                           |
|               |                     | 図画工作科誕生<br>中学校美術科、技術・家庭科                              |                           |

(山形 寛 著 『日本美術教育史』より作成)

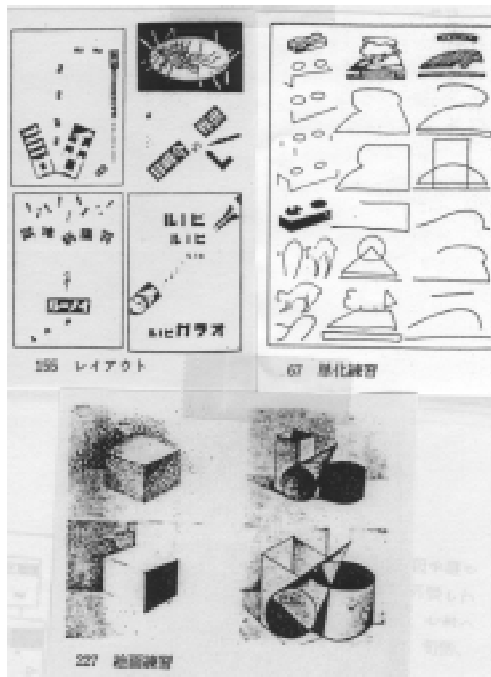
\*注：年次については主なもののみを掲載

に入ってからのものである。その理由としては、手工教育が重視されてきたこと、合科教授や総合教授の研究が盛んになり、教科の性質の比較的接近している図画科と手工科とを合一させようとの主張、研究が盛んになったことなどがあげられる。

(2) 構成教育の導入

昭和初期に入り、造形全般に対して、より日常的な点から美を発見創造、学習し、基礎的な造形能力の育成を目的とした運動に構成教育がある。構成教育の原点は、バウハウス（大正8年ドイツのワイマールの美術学校と工芸学校を合併して作られた総合的な造形学校）である。我が国の構成教育運動は、昭和5年バウハウスに学んだ水谷武彦によって始められた。これをうけて、川喜田煉七郎・武井勝雄らによって普通教育への導入が行われた。当時、普通教育では図画と手工とに分かれており、自由画教育の図画一辺倒に対する批判もあり、図画と手工との基礎教育として構成教育の導入があったと言われている。川喜田は構成教育について次のように述べている。

資料3 『構成教育大系』より（昭9年）



構成教育とは丸や三角を並べることではない。所謂構成派模様を描くことでもない。絵や彫刻に、めんどろな理屈をつけることでもない。我々の日常の生活のごくありふれた、ごく卑近なことを十分取り出してみ、それを新しい目でみなほして、それを鑑賞したり、作ったりする上のコツをつかみ取るための教育、それが構成教育である。  
 （『構成教育体系』学校美術協会、昭9：資料3）

ここで川喜田は、構成という言葉を用いて図画と手工を統合した新しい造形教育を提示した。構成教育運動は主に東京を中心に行われていたが、図案指導に関心の高かった岩崎喜久雄はその理論を学び、実技講習会などにも参加し、共鳴者の中でも熱心な実践家であったとされている。昭和11年には『図案指導体系』（岩崎喜久雄・武井勝雄・中谷健次共著：学校美術協会出版部）を発行している。そして、当時勤務していた伊勢崎南尋常高等小学校（以下伊勢崎南小学校）を中心に、構成教育を生かした実践を行った。

2 昭和初期の群馬県の図画教育

(1) 県内の当時の様子

岩崎喜久雄の恩師である齊藤始雄（群馬県師範学校教諭）は、大正9年に『自由画教育と実際』（表2）を著した。齊藤が児童

表2 群馬県内の図画教育と岩崎喜久雄の活動

|     | 国内の動向   | 県内の動向                                | 岩崎喜久雄の活動                                 |
|-----|---|--------------------------------------|--|
| 大 9 | 自由画教育提唱   | 齋藤始雄『自由画教育と実際』発表                     | 伊勢崎南小勤務                                  |
| 10  |   |                                      |  |
| 昭 5 |   |                                      |  |
| 7   |   |                                      |  |
| 9   |   |                                      |  |
| 10  | 群馬県図画教育研究会結成<br>群馬女子師範附小（構成教育を導入した授業）<br>『群馬美育』刊行 | 色彩研究のための国内留学＜資料編1参照＞<br>構作主義図画手工研究大会 |  |
| 12  |   |                                      |  |
| 13  |   |                                      | 教職退職（学校美術協会入社）<br>芸能図画教科書（色彩）執筆          |
| 14  |   |                                      |  |
| 15  |   |                                      |  |
| 16  | 芸能科図画・工作<br>初等科図画・手工                              | 日本美術教育連合設立                           | 色彩教育研究会主事<br>日本美術教育連合初代事務局長（32年）・日本色彩社入社 |
| 17  |   |                                      |  |
| 22  | 図画工作科<br>色彩教育研究会<br>日本美術教育連合設立                    |                                      |  |
| 23  |   |                                      |  |
| 28  |   |                                      |  |

（山形寛著『日本美術教育史』・岩崎喜久雄著『夫婦随筆・刻む』より作成）  
 \*注：年次については主なもののみを掲載

の個性や創造性を尊重する点は、山本鼎の考えと共通するが、臨画を否定し具体的教授法を示さない山本と異なり、臨画も尊重し具体的指導手順を示した独自の自由画教育を提唱した。山本の自由画教育運動は全国的な流行となるが、斉藤は県内各地に出向き、盛んに講演や指導を行っており、この期の教授案を見ても県内では斉藤の自由画教育の影響が強く見受けられる。そのため、昭和に入り自由画教育が本来の趣旨を失い、放任の図画の傾向が全国的に強くなる中、群馬県内では図画教育としての指導法が研究され、熱心な活動が行われていったと考えられる。

## (2) 群馬県図画教育研究会の活動

昭和7年、斉藤始雄やその指導を受けた岩崎、加藤守善しゅぜんらが中心となり、文部省が小学校の新図画教科書『小学図画』を発売するのを期に群馬県図画教育研究会を結成した。発足当初は小集団であったが、講習、研究会、学事会合同授業研究、審査会、写生旅行等を行い、次第に県下での活動を広げていった。昭和12年には、会員の機関雑誌として月刊誌『群馬美育』(表3)を刊行し、県内の指導者の図画教育に関する考え方や実践が報告された。

当時このような教育研究組織が結成され、図画教育の研究や交流が県内で行われていたことは大変注目すべきことであり、その活動の中から他県に先駆けた教育活動が進められていった。

岩崎は『群馬美育』の編集発行者であり、この誌上で構成教育の理論や実践を積極的に発表する。群馬県図画教育研究会の活動を通して構成教育は県下に広がり、昭和10年には群馬女子師範附属小学校(加藤が中心)で構成教育の考え方を導入した教育研究会も開かれている。

## 3 岩崎喜久雄の教育活動(資料編2、3参照:岩崎の論文・岩崎聞き取り)

大正10年、岩崎は群馬師範で斉藤の自由画教育論(前述)を学ぶ。当時全国的にもまだ図画の指導が確立しない中で、学生時代から熱心に図画の指導法の研究に取り組み、ここで写生画だけではない、より広い観点で図画教育をとらえ、個性を生かした教育を進めていこうとする素地が養われたと考えられる。さらに卒業後、大正14年から桐生、伊勢崎といった織物工業の盛んな地で教鞭をとることになり、地域の影響も受けて図案や色彩への関心が高くなっていったと考えられ、東京を中心とした構成教育運動に賛同していく。岩崎は『構成教育大系』、雑誌『学校美術』、実技講習会などによって構成教育を学び、共鳴者の中でも特に熱心な実践家であった。特に昭和5年から15年の11年間は伊勢崎南小学校に勤務し、構成教育を取り入れた図画教育の研究、実践は、群馬県内ばかりでなく全国的にも注目された。

### (1) 図画教育のとらえ方

岩崎は、群馬美育の創刊号の巻頭に記した『人間学習としての図画学習』の中で、技能教科(図画、手工)が、作品の結果を重視し一部の優秀な生徒の制作に重点の置かれた指導であることを批判している。また、図画教育の目的を児童一人一人におくことを強く主張し、次のように述べている。

図画教育の目的を作品におく時、生命は無視され、人間は鋳型の産物となり、指導者の技術以上に発

表3 『群馬美育』の内容(昭和12年~15年)

| 掲載内容                    | 主な掲載記事(執筆者)   |
|-------------------------|---|
| 群馬の図画教育について             | ・群馬美育よ(齋藤始雄)<br>・教材展覧会合評(対談:8名)<br>・新田郡に於ける図画の状況と群馬美育に対する要望(澤野校:栗原米三郎)他 |
| 図画教育についての理論・主張          | ・人間としての図画学習(岩崎)<br>・図画教育再考(加藤光造)<br>・図画手工一元化に於ける構作科への意見(岩崎)他            |
| 指導解説                    | ・図案の指導解説(岩崎)<br>・思想画指導に就いて(高崎南校:坂本文男)<br>・小学図画に於ける図案の指導着眼点(桐生南校:久保田梧郎)他 |
| 教材解説                    | 尋常1年から高等科2年までの8学年にわたる指導略案が毎月載せられ、内容も充実したものであった。                         |
| 研究会や美術展の紹介・美育通信・会員募集その他 |   |

展性を持ってこないのである。・・・中略・・・教育は人にとって作品其のものに有るべきではない。優等児には優等児の図画学習があり、劣等児には劣等児としての特殊の図画学習がある。・・・児童一人としての飛躍発展の度を計らなければならない。そして一歩でも引き上げていく教育活動でなければならないと信ずるのである。・・・今後の新しい図画教育に於いては、人間教育の本道に立ち返り、消極より積極へ美の構成建設への発展を辿らなければならぬと信ずるのである。(『群馬美育』創刊号、昭12、6)

この個性を認め、結果よりも制作過程を重視し、人間教育としての基盤が図画教育にあるという考え方が、作品主義ではない、写生のみでない図画教育を岩崎が追い求めるものになっていくと考えられる。

### (2) 図案指導を重視する考え方

昭和7年に『小学図画』が文部省より刊行され、それまでの自由画中心の図画の時間が見直されていくようになる。岩崎は、『小学図画』の学習内容の中で児童の実生活に最も緊密な関係にある図案指導を重視し、その指導について研究と実践をしていった。

文部省は『小学図画』刊行に伴ってはじめて教師用指導書を発行するが、岩崎は独自に指導法を研究し、『新上野』や『群馬美育』に発表していった。これは、構成教育が生活を美化し、美と実用を一致できるものであるとしてその指導法を取り入れ、文部省の指導例に比べ、子どもの実態に合わせ、また単純化や画面構成の指導過程を手書きの図案例まで示して述べられたもので、指導者が参考にして指導しやすいものであった<資料編4参照>。

また、『小学図画』の内容では図案教育はまだ不十分であり、小学図画の図案教材以外に、或いはその代わりに、構成教育を取り入れた教材「線の構成」「単化練習」「明暗練習」「色彩の常識」「色彩構成」「実物構成」等を指導していきたい。」と述べている。

昭和10年には、『図画科の存在価値』(『新上野』5月号)と題して、今まで忘れられていた子どもの図案構成力を引き出すことが図画教育にとって重要であり、写生、思想画と同等に図案の力を付けていかなければならないことを論じている。

さらに、『従来の図案教育と今後の図案教育』の中で今後の図案教育は平面のみではなく、立体的にこれを拡充し、実生活に関係して生活を美化し、生活の中に生かしていかなければならないと言っている。これは、従来の平面のみを扱った図画教育の領域を超える考え方であり、立体構成を取り入れ生活の中に生かす美という点で、手工科との統合の考え方が確立されていくことになる。

### (3) 「構作科」の提唱

昭和13年2月、「構作科」設置案が学校美術協会(後藤福治郎)により発表される。「構作科」提案は図画手工合一案であり、

「・・・従来は制度として、図画科と工作科とが別個に存在するため、その有機的連絡を欠き、図案は単なる紙上架空の試みに終わるの一方、手工は細工方面に傾いて、美的意匠を閉脚し、著しく低度の存在として冷笑されてきたのであった。」「・・・従来行われていた図画科手工科を解消し、新しき陶冶目的による構作科・・・を創立すべきである。」(『学校美術』 昭13年)

など従来の図画と手工に対する反省の上に立ち、構成教育を学んだ者たちが、我が国の教育の中により機能美を追求した教育分野を求めようとしたものであった。岩崎は提案者の一人として活動し、構作科の理論と体系と方法とが、現場でどれだけ実践できるか、教育的であるかの証明を具体的に示す最初の機会として伊勢崎南小学校での研究発表を行った。

結局、この主張は戦時下の教育改革の中に取り入れられず、昭和16年国民学校令公布により図画科、手工科は芸能科図画・工作とされ、国家主義的な教育が行われ、構作科の主張は消滅

していくことになる。

(4) 伊勢崎南小学校での実践

昭和5～15年の11年間、岩崎が図画の専科として勤務した伊勢崎南小学校は、当時の最高の設備で新設された学校である。指導者も優秀な人材が集められ、その教育内容は全分野に渡って高い水準を誇っていた。各教科で毎日のように研究授業、研究会などが行なわれ、非常に熱心な教育が行われていた。

なかでも図画、手工科については特に全国的にその名を知られるものであり、岩崎、小川参次（元群馬大学教授）の2人を中心として指導が進められていた。当時図画と手工は別の教科であり、岩崎と手工専科の小川が指導に当たっていたが、構成教育を取り入れた図画と手工を同一教科とした指導を行っていった。小川は当時の教育の様子を次のように説明している。

この研究の背景にあったのは合理主義の教育で当時世界的に注目を浴びたドイツのバウハウスの教育の流れをくむもので、造形的な活動の目的を美しさと機能的に優れていることの二つを同時に満たすことを求め、図画工作科の教育をそのようなものとして追求するものであった。学校は自然の持つ理法とその中において合理的なものを追求し、用美一体の機能中心の生活を築いていこうとするものであった。（伊勢崎市立南小学校創立五十周年記念誌『南小五十年のあゆみ』昭55年）

(5) 構作主義「新図画手工教育研究会」

昭和14年7月2日、伊勢崎南小学校で構作主義「新図画手工教育研究会」が開催された。構作主義とは、構成教育の要素を取り入れ、さらに当時別の教科であった図画と手工を同一教科とした生活を基盤とした機能重視の教育である（表4）。研究会は当時の図画、手工教育のとらえ方を大きく変え、教科としての指導法を確立しようとするものであった。全国から約600名（県内約450名、埼玉約100名、その他の県約50名）を超える参加者があり、全国的にもその実践が注目された。

研究発表は、全ての学年の公開授業と教材展覧会を中心に行われた。

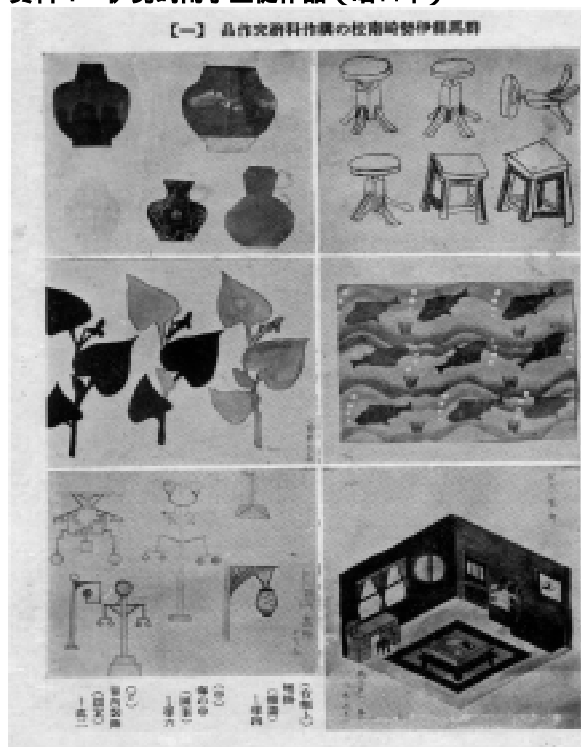
授業公開（資料4）＜資料編5、6参照＞

公開授業は8学年10学級で行われた。教法の全分野にわたる実践公開であり、岩崎の指導の下基礎的な内容を重視し、生活に生かせる教材を使い、教材教具の工夫や授業形態の工夫などもされたものであった。また、作品の比較鑑賞、相互評価なども取り入れられており、指導案には成績品批判の標準（現行の評価の観点にあたる）も示されていた。さらに、教材それぞれの

表4 構作主義「新図画手工教育大要」(昭14年)

|                                   |  |  |
|-----------------------------------|--|--|
| 1, 本教育の精神                         |  |  |
| (1) 生活を基調とする教育である。                |  |  |
| (2) 教科性を確立した教育である。                |  |  |
| (3) 機能重視の教育である。                   |  |  |
| (4) 図画手工一元化による教育である。              |  |  |
| 2, 本教育の趣旨(略)                      |  |  |
| 3, 教法                             |  |  |
| 描く力                               | 作る力  | 見たり・考えたり   |
| (1) 描画<br>イ、構想画<br>ロ、写生画<br>ハ、臨模画 | (2) 図案<br>イ、構成<br>ロ、設計<br>ハ、図法<br>(3) 工作<br>イ、構想作<br>ロ、写生作<br>ハ、製図作<br>ニ、臨模作 | (4) 観識<br>イ、自然美<br>ロ、造形美術<br>ハ、造形知識<br>材料、住居<br>工芸、建築<br>服飾、食物食器<br>国防交通<br>造形用語 |

資料4 伊勢崎南小生徒作品(昭14年)



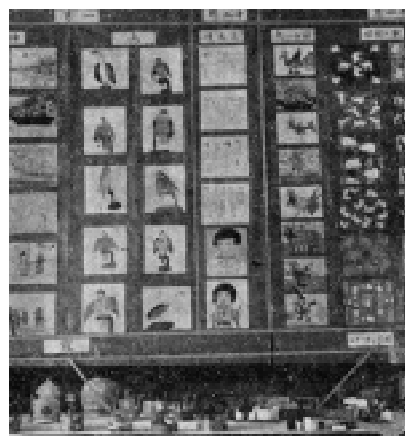
指導の系統が明確に示され、事前の教材との関連や、事後の発展教材、教科外や生活への関連も示されていることは注目すべき点である。

#### 教材展覧会

教材展十教室は、今回の研究会を最も意義あらしめた一つであった。(中略)教材展は、学年室八教室、特別室二教室とに分かれた。学年室には各々其の学年の作品が月を追い指導順に整然と陳列されて教材体系が明確に示されていた。特別教室は、描画、図案、工作、観識の四教法を経とし学年を緯として明瞭に教材の系統を示したものである。即ち、上段は全て描画を陳列し、第二段は図案作品を、第三段は工作品を第四段は観識教材をという様に、描画だけの系統が尋一より高二に至るまで明瞭にあり、図案も工作も観識もその発達系列の順序に従って陳列した。(『学校美術』:新図画手工研究会記録、岩崎、昭和14年)

上記のように、八年間の図画手工教育がそれぞれの発達段階に合わせて三つの教法(各分野)ごとの系統を明確に示し、また、学年内での指導内容をどの分野も充実させて行おうとしたことは、大変価値のある、今日の美術教育にも生かしていける実践である(資料5) <資料編5、7参照>。

資料5「新図画手工教育研究会」  
教材展覧会(昭和14年)



#### 4 今日的美術教育に生かされるもの

構成教育を導入し、図画と手工を同一教科とした実践は、当時の論評等で機能美を追求しすぎたとの批判もあるが、人間の生活と生き方をはぐくむことを目的として、造形教育として図画と手工をとらえた理論・実践であり、次のような点で今日的美術教育に生かされていくと考える。

##### (1) 人間教育としての図画教育のとらえ方

昭和初期、まだ図画一辺倒だった時代に、構成教育の導入により生活の中に生かす美術という考え方が生まれ、より広い観点から教育をとらえたことは画期的なことであった。岩崎は総合的な造形教育としての立場から人間教育としての図画を考え、その教育理念のもとに教育実践を行っていった<資料編2参照>。

今回の学習指導要領「美術」の改訂に関して次のような検討が図られている。

美術教育は、「美術による教育」や「美術の教育」などその目的によって様々なとらえ方がされてきた。多義的であるために指導者の定義づけや考え方が先行し、学校教育での美術教育の目標研究を疎かにする傾向がみられる。その結果、何のための学校美術教育かという認識が曖昧になり、目先の授業の方法に比重が置かれやすい。今回の改訂にあたっては誤った美術教育の在り方を正して、学校教育としての美術教育を明らかにした上で目標を示すようにする。(中略)

\*これから取り組むべき新しい課題

##### (1) 美術の教科性を踏まえた指導理念の確立

学校教育としての美術の基本的な構えを明確に押さえてかかることが第一の課題である。これまでの美術教育は自由な美術教育と美術教育とが混同されてきたと言われる。今回の改訂はその混同を正しい学校教育としての美術科の確かな実践の方向性を明示している。(後略)

(遠藤友麗 編著『改訂中学校学習指導要領の展開、美術編』2001年)

現場での指導に当たっても、指導者一人一人が「何のための学校美術教育か」を認識し、美術の教科性を押さえ、「生きる力」につながる指導理念のもとに実践をしていく必要がある。

##### (2) 系統性や他との関連の重視

昭和14年の「図画手工研究大会」での実践に見られるように、岩崎は各分野の系統性を重視し、学年の発達段階に応じた指導の成果を作品として発表している。このことは指導の目的を

明確にした取組として非常に評価されるものである。また、各教材の指導に当たっても前時の指導との関連、他分野との関連、事後の教科としての発展課題や生活への発展、応用が必ず示されている<資料編6、7参照>。

新教育課程になり美術科では、削減された時数の中で有効に学習を進めること、他教科、他領域との関連を図ることが必要である。今後、図工と美術の指導内容の系統性を明確にし、小学校と中学校の交流を深め、高等学校、さらに生涯学習へとつなげていけるよう、各教材の価値の吟味、複合教材の工夫等を学校間や社会教育との連携を密にして行っていかなければならない。上記のような岩崎の実践は、今日の美術教育を進める上で大変参考になるものである。

### (3) 感性や価値観をはぐくみ個々の生き方を探る教科としての位置づけ

岩崎の実践は、生活に生かす美術、用美一体の機能中心の生活を築いていこうとするものであった。授業の中で作品の優劣だけを目的とせず、個々の学習を大事にし内容を生活に関連づけることで、それぞれの生活や社会に美術を生かしていくための教材開発や指導法を追求した。図画手工教育を個々の生き方を探る教科として位置づけていたと考えられる。

また、図画手工教育を展開する中で岩崎は、発達段階に応じた基礎、基本的事項を身に付けることを重視し、構成教育を取り入れた指導法の開発を行っている。構成教育は、世界的にも現代デザインの基礎とされており、それを日本の教育に適応させようとした実践であったと考えられ、ものとのらえ方や基礎技能、構成力養成の指導、色彩の指導に特徴が見られる。

現在の美術教育の問題点として、子どもたちの感性や発想・構想、構成力の乏しさがあげられているが、学校美術教育の価値の復権のために、戦後の美術教育がこれまで捨ててしまった重要な内容を取り戻すべきであるとされている(遠藤友麗編著、『改訂中学校学習指導要領の展開、美術編』2001年)。その内容の中に、ものづくり(産業の基盤)の基礎的技術、方法・生活デザイン能力(生活の中で具体的にデザインし改善・想像する能力)があげられている。時代背景は違っているが、生活に生かす美術を追究し、個を重視した岩崎の指導は今日の実践の中で生かしていけるものとする。

## 研究のまとめと今後の課題

昭和16年、18年の教育課程の改訂により、図画科・手工科は、芸能科図画・芸能科工作と改組され軍事態勢の教育に組み込まれていく。実践提案が行われきた構成教育も、造形教育としての総合の問題をかかえたまま図画や手工とともに戦後の教育に移行されていくことになる。

そんな時代背景の中で、群馬県の美術教育も沈滞していくが、昭和15年岩崎は伊勢崎南小学校を退職後、東京の学校美術協会に入社し活躍の場を全国に広げていく。岩崎は構成教育の中でも特に色彩の基礎学習を重視し、戦後は色彩教育の中心として教科書執筆も行っており、現在の我が国の美術教育を作り上げた一人として重要な役割を果たしている。

構成教育も自由主義の社会になって改めて見直され、現在のデザイン教育に生かされている。今回の調査で、その原点となるのが昭和初期に群馬県内で行われた岩崎らの現場での実践であることが分かった。また、上記( - 4 )のような理論的な面、指導法、教科としての価値などは現在の美術教育にとっても重要な課題であり、これからのよりよい指導法を考える上で大きな手がかりになると考える。

今後さらに、戦後の岩崎の活動、特に日本の色彩教育に果たした役割を中心に調査を進め、岩崎の目指した美術教育を明らかにしていきたい。

<主な参考文献(その他は資料編8参照)>

- ・山形 寛 著 『日本美術教育史』 黎明書房 昭和42年
- ・月刊誌『群馬美育』 群馬県図画教育研究会 昭和12年6月創刊号～15年1学期号他